

疎開学童の寮母

宝金 ヒデ（大正 14 年生まれ）

1944 年（昭和 19 年 8 月 31 日東京都葛飾区住吉国民学校（現住吉小学校）集団疎開の児童（210 人）が直江津駅に降り立ちました。受入先の春日村（現上越市）の西本願寺国府別院（通称小丸山別院）に男子 80 人、料亭旅館わくら楼に男子 50 人、光源寺に女子 80 人が、集団生活を送ることになりました。

そして当時 19 才の私は『東京都住吉国民学校集団疎開寮母を命ず』の辞令を頂き別院でお姉さん寮母として奮闘記の始まりとなりました。

朝六時「起床、起床」と寮長が大声を出して「ガラン、ガラン」と鐘を鳴らします。

「さあ起きましよう、オシッコ失敗した人は、お布団畳んじゃ駄目よ」

「お姉さんどうして怒らないの、東京じゃお母さんに叱られるよ」

「だって、お姉さん叱ったら、あんたこっそりお布団畳むでしょう、びちょびちょのお寝巻き丸めて隠すでしょう、夜になったらどうしょう」

「うーん、ごめんなさい」

起床、洗面、朝の身支度、朝食、登校、朝の 2 時間は 80 人の学童の世話に 3 人の寮母はてんてこ舞いの忙しさです。

「いってらっしゃい」と学校（国府国民学校）へ送り出して、掃除洗濯、子供達の脱ぎ捨てた衣類は、ノミ、シラミの巣になっています。殺虫剤など皆無の時代唯一の駆除方法は、盥に入れた衣類に熱湯をかけることでした。配給の洗剤を少しずつ使い、弱っている布を破らないようにと、気を使いながらの洗濯作業でした。別院の鐘楼は雨天のときの格好の物干し場となりました。（梵鐘は軍に供出されていた）

別院寮は北陸線の沿線なので、汽車の音を聞くと「お家に帰りたい」と泣き出す 3 年生を 6 年生が「泣くなよ、おまえが泣くと僕だって泣きたくなるじゃないか、僕だって我慢しているんだよ」5、6 年生はお兄さんぶりを発揮して、3、4 年生の面倒をみる、3、4 年生は 5、6 年生に甘える、そんな仲むつまじい、微笑ましい光景が展開される毎日でした。

衣食住総ての物資は配給制度で何一つとして自由には買えない時代でした。別院の裏庭に茗荷畠があり、茗荷の漬け物、味噌汁の具も茗荷、かぼちゃと茗荷の煮物、三食茗荷、茗荷、茗荷の毎日。大豆のほうが多い豆ごはんや大根飯、さつまいもの葉っぱやつらのたっぷり入った雑炊、育ち盛りの子供たちは、満腹とはどんな状態なのかを知らなかったと思います。寮母 3 人で北陸線の線路沿いに食べられる草を求めて、よもぎ、やぶかぞう、ひめむかしよもぎなどの野草摘みをしたり近くの田んぼにイナゴ捕りに行ったりしました。食料品や新炭の配給の連絡が入ると、配給所まで 6 年生は、東京では経験したこともなかったでしょうに、大八車やリヤカーを引き、小さな背中に荒縄で薪を背負って寮まで運んだりしていた健気な姿は脳裏に焼きついて忘れることはありません。

『勝つ日まで頑張りましょう』と、ノミ、シラミ、^{やぶか}藪蚊に刺されながら淋しさと空腹にたえての集団生活も、1945年、昭和20年8月15日の終戦の日を迎え、「日本本当に負けたの？僕達どうなるの？」と尋ねる子供たちに、20才になったばかりの私は答える言葉はありませんでした。私自身もこれからの日本はどうなるのでしょうかと不安が募るばかりでした。

「東京のお家焼けなかったじゃないの、お家へ帰るのよ、良かったね」

「ほんとう？本当に帰れるの、何時、何時帰れるの」

子供たちに笑顔が見えました。「何時かまだわからないけど東京に空襲がなくなったら、疎開していなくていいでしょう」と元気付けるばかりでした。その日の夜は別院寮に明るく電灯がとぼされました。

葛飾は戦災を免れたので、比較的早く疎開解除となり10月末には、無事に東京へ帰って行きました。

田舎育ちの世間知らずの小娘の私に大切なお子さんを預けられた、東京のご両親はどんなにか心許無い思いをされたことかと思います。

学童疎開を経験された方々は70才代になっておられます。少年期に培われた、強靱な精神力が戦後の日本の復興に^{こうげん}貢献されたのではないのでしょうか。